

京都大学	博士(文学)	氏名	稲垣裕史
論文題目	王朝交代期の文学 宋元易代篇		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>第一章 「遺民」学再考</p> <p>「遺民」の語は、現代においては旧王朝に節義を立て、新王朝に出仕しない人物の呼称にほぼ限定される。近年、文学研究において「遺民詩人」という定着しつつあるが、宋末元初に限定的な意味での「遺民」像が未だ確立していないとすれば、この語によって当時の文人を総括することは出来ない。本章は、宋末元初と明代における「遺民」の定義を比較し、従来の研究において注意されなかった宋末遺民の子どもたちである第二世代の言説を通して、概念論・感情論に偏向しがちな先行研究の問題点を指摘する。</p> <p>宋末元初における「遺民」は「旧王朝の民」ほどの意味であり、新興王朝に対する「去就」は特に問題とされていない。一方、明代における「遺民」の定義は現在とほぼ同様であり、実際に「遺民」として扱われている人々の経歴を見れば、その殆どが宋元を通じて布衣か卑官であり、旧王朝を記念する何らかの活動・著述を行っている。</p> <p>宋末元初に「去就」の議論を適用する事の非について、我が国で最初に論じたのは村上哲見であろう。氏は、宋末士人は元朝への出仕に何のわだかまりも無かったとしている。これは社会における交際と個人の感情とを短絡させた議論であり、実情に合わない。少年期を宋朝に送り、青年期以降を元朝の臣民として過ごした廬陵の人、劉岳申と劉將孫は、それぞれ正統論と科挙廃止の観点から宋朝に対する自己の立場を明らかにしている。文天祥の大部な伝記を著した劉岳申は、元朝の功臣を讃えるべき文章の中で宋朝の正統性について論じ、旧宋士人としての立場を忌憚無く示している。また著名な文学者劉辰翁を父に持つ劉將孫は、科挙の廃止によって不遇の人生を余儀なくされた士人たちに深い同情を寄せ、科挙によってはぐくまれた時文の伝統の消滅を憂慮している。王朝交替に対する彼らの感情は複雑であり、元朝士人との交際の有無から彼らの内面を単純に分析することは出来ない。</p> <p>第二章 二つの『指南録』自序</p> <p>宋末の忠臣として知られる文天祥の著した『指南録』全四巻の巻首には、「前序」と「後序」の二篇の自序が収録されている。中国古典において、一つの著作に同一著者</p>			

による自序が複数収められることは稀である。『指南録』に「前序」と「後序」、二つの自序が収められる理由を明らかにするのが本章の目的である。

二つの序の前半部分の記述は、語句・句法のレベルで大幅に重複しており、「前序」に比して「後序」の方が、序文としてより相応しい特徴を備えている。このことから、二つの序文が成立当初から双方とも巻首に置かれていたとは考えにくい。

『指南録』は成立までに三つの段階を経ている。第一に、著者が元軍から逃亡する最中、同時的に記録した覚書の段階。第二に、覚書に加筆して「前序」を附した詩稿三巻の段階。第三に、それらに新たな作品と「後序」を加えた、現在の全四巻の段階である。両序の記述の重複、および序文に相応しい「後序」の特徴を鑑みるに、巻四が成立した時点で「前序」と差し替えるために書かれた新たな序文が「後序」であったと類推できる。

『指南録』の記述を文中に巧みに引用する王炎午「生祭文丞相文」は、『指南録』の最も早い読書記録の一つに数えられる。王炎午は文天祥と面識のある同郷の後輩であるから、『指南録』が完成から間もなく読者を獲得していたことが確認できる。これらを総合するに、一度序文から外された「前序」は、王炎午のような周辺読者によって『指南録』の伝写の過程で「忠臣の遺文」として再録され、双方とも自序であるという理由により、「後序」と共に巻首に置かれるようになったと推測される。

第三章 王炎午「生祭文丞相文」とその時代

王炎午「生祭文丞相文」は、大都へ連行される文天祥に名誉の自決を勧める文章である。祭文は、死者もしくは自然物を祭るのが一般であり、生存中の人物に死を勧める「生祭文」は、文学史の常識から大きく逸脱している。本章は、一見奇抜に見える「生祭」の由来を明らかにし、先行研究において正しく理解されていない「生祭文」の論理展開を追いながら、その文体と修辞の同時代的特徴、および作品成立の背景にあった当時の世論について考察する。

「生祭」は王炎午の独創ではなく、科挙の文体改革を推進し、試験の合格基準を変更した歐陽脩を呪詛する文に由来する。王炎午の同郷・同時代人であった王幼孫も同じ頃「生祭文」を作り、文天祥の死を促している。

王炎午の「生祭文」は、まず輝かしい経歴を持つ文天祥に唯一欠けるものが「死」であるとした後、彼が自決に及ばぬ理由を三つ推測し、それらを逐一論難することで、文天祥の生存の意義を否定する。次に、自らが同郷の後輩、かつ主従の間柄であると告白し、故郷における名誉の死を促す。最後に、自決のもたらす名誉、生存のもたらす不名誉を列挙し、文天祥の決断を仰ぐ。

「生祭文」の論理展開は、科挙の試験科目である策論の文体を模倣したものであり、その修辞には律賦と関係の深い四六文の特徴が認められる。また文中、文天祥の去就

をめぐって展開される三つの論難は、議論のために仮想されたものではなく、当時存在した世論に基づくと考えられる。

第四章 汪元量「湖州歌」九十八首の物語性

汪元量「湖州歌」九十八首は、宋朝降伏後に大都へ連行された后妃たちの旅を物語風に描いた連作詩である。連作詩は通常、ある主題に基づいて作られた詩歌の寄せ集めであり、詩の配列が一定のコンテキストを生成する「湖州歌」のような例は、中国古典詩でも極めて珍しい。本章は、旅程の地理的区分に従って「湖州歌」を八段に分け、各段の展開を個別に追いつつ、全篇に通底する特徴を合わせて指摘する。

汪元量は実際に后妃たちの旅に同行している。このため先行研究は「湖州歌」を記録文学として扱い、詩に記録した旅先の見聞を、大都到着後に集大成したものと見做してきた。この説は以下の三点から見て適当ではない。第一に、「湖州歌」に描かれる歴史的イベントは伝聞や空想に依った箇所も多く、作者の見聞だけに基づくのではない。第二に、「湖州歌」は物語を効果的に演出するための操作を行っており、詩歌の単純な集成ではない。第三に、作中人物、特に主人公である女性の形象に作者の脚色が施され、見聞の忠実な記録とは言えない。

杜甫「夔州歌」十絶句の系譜に連なる「湖州歌」は、「民歌」としての性格が濃厚である。また「湖州歌」九十八首が本来一百首であったとするならば、花藥夫人「宮詩」一百首との関連性が指摘できる。宋によって滅ぼされた後蜀の後妃である花藥夫人を、「亡国の后妃の物語」である「湖州歌」が意識していた可能性は高い。さらに、「湖州歌」に描かれる后妃の悲劇は、汪元量の同時代人にとって「現代史」であり、遠い昔ではないが既に過去に属する歴史物語であった。以上の三点を総合すれば、「湖州歌」は記録文学ではなく、むしろ「后妃の北遷」という「現代史」を「歌」として再構成した「歌物語」であったと定義できる。

第五章 俞德鄰「京口遣懷」一百韻にみる歴史叙述

宋の遺民として知られる俞德鄰の長編五言古詩「京口遣懷 呈張彦明劉伯宣郎中并諸友一百韻」は、宋末の歴史を編年体で記した作品である。宋以前における一百韻詩は自伝的長編詩であることが多く、本詩のように自伝から距離を置いて同時代史を叙述した例は殆ど類を見ない。また、従来の研究では、遺民同士の詩歌の応酬に注目するのみで、宋の遺民と元の官僚との間で交わされた詩歌の授受には無関心であった。詩の受け手である張焄（字彦明）・劉宣（字伯宣）は早くから元朝に仕えた北方士人であり、俞德鄰の友人であった。本章は、本詩が史書の筆法を意識的に模倣した歴史叙述であることを明らかにし、またこのような長大な歴史叙述が、なぜ政治的立場を異

にする北方士人に献呈されたのかについて考察する。

正史を始めとする一般の史書は先行する文献を史料に用いるが、同時代史である本詩は作者自身の体験と記憶を有力な「史料」としている。ただし、その歴史叙述は正史を模して叙事と歴史批評によって構成され、作者の個人的体験への言及は意識的に避けられている。この事実から、本詩が自伝的長編詩の系譜に属さない、文学史上注目に値する作例であることが分かる。

また本詩は、大量の戦死者を出した揚州攻略戦について言及している。俞德鄰は揚州対岸の鎮江に居住し、戦闘の様子を目撃していたと考えられ、一方、詩の受け手である張炤は、攻略戦の直接の功労者であった。詩の作者と受け手、双方の生々しい記憶を喚起する本詩が、元朝の地方高級官僚である張炤・劉宣らに対して贈られた理由は、宋元両朝間の歴史認識の相違を明確に示し、彼ら元朝地方官僚のもたらず再三の出仕要請を截然と拒否するためであったと思われる。

(論文審査の結果の要旨)

中国の文人にとって仕隠の選択、すなわち官として仕えるか隠逸を選ぶか、それはいつの時代にも抱かれた問いであり、文学の主題の一つであったが、たまたま二つの王朝のはざまに生を受けた文人の場合、新旧王朝に対する態度を迫られるという、さらなる問題を抱えることになる。それゆえ、王朝交替期の文学は複雑な様相を呈し、研究対象として興味をそそられるものではある。しかしながら、日本ではこれまで避けられる傾向にあった。それは中国・台湾における「遺民文学」研究が「民族英雄」「愛国精神」の発露として顕彰するのに同調できないためであった。論者は前もって判断を用意する態度を拒絶し、作品より作者の生き方を評価する態度を否定し、作品そのものを精緻に分析することを通して「遺民文学」の真相を新たに捉え直そうとする。これは日本におけるこの分野の研究の空白を埋めるのみならず、遺民文学研究の取るべき方法を示す点でも重要である。またそのために、本論では文天祥を除けば、従来埋もれがちな作者・作品を対象としているが、みずから材料を捜求し、それを丁寧に読解しているという点においても評価されるべきである。

王朝交替期の文学に関心をもつ論者は、本論においては宋から元へと王朝が替わる時期に焦点を合わせる。そしてまず、新王朝に参加することを潔しとしない倫理観は明清交替期に顕著となるものであって、宋元の交ではまだ顕在化していないことを説き、「遺民」という言葉が伴う先入観を払拭することから始める。

宋元交替期において最も名高い人物は文天祥であるが、「第二章 二つの『指南録』自序」は文天祥の逃亡記である『指南録』がどのような経緯で二篇の「自序」を併載するに至ったかを文献学的に明らかにしたものである。論者は『指南録』の最も早い刊本、静嘉堂本を重要な手がかりとして、二篇の自序を掲げる現行の四巻本がいかにか成立したかを跡づけ、そこに論者の文献処理能力を発揮する。それによれば「後序」は「前序」が書かれてからわずか二か月後に、「前序」と差し替えるべく書き改められた、ところが文天祥の意に反してどちらも巻頭に掲げられる結果になった、という。二篇の「自序」には重なる内容を含みながらも、大きな差異も見られる。「前序」が数々の危険を乗り越えて生還した喜びを綴るのに対して、「後序」は自死を欲しながらも生還を選択したことに対する弁明が目立つ。ならば「後序」を書かざるをえなかった文天祥の懊悩にまで踏み込むことはできなかったのか。この章では意図的にテキストの考證に限定したのかも知れないが、「序」の内容に立ち入れば、文学研究としても充実したものになりえたであろう。

「第三章 王炎午「生祭文丞相文」とその時代」は、無名の若者（といってもよい）王炎午が文天祥に自死を勧めた文を分析したものである。それが論理の面からも、情動の面からも、周到な工夫を凝らして説得力あるものになっていることを明らかにする。この文は本来死者を弔う文体である「祭文」を生者に向けて書いたという奇抜さ、死を勧告する強烈さに目を奪われがちであるが、論者は生者の「祭文」を作ることは

王炎午の独創ではないこと、文天祥に死を求めるのは当時の輿論の一部であったこと、また当時、文天祥の去就については様々な意見が混在していたことを説いて、この「生きながら祭る文」を新たに位置づける。これは作品を単独で取り出しては見誤ってしまい、文体の流れのなかで、またその時代の拡がりのなかで捉えてこそ正確な理解が可能であることを示す好例でもある。

「第四章 汪元量「湖州歌」九十八首の物語性」は、宋の王室（后妃・宮女を中心とする）が臨安（杭州市）から元の大都（北京市）へ移されるのに同行した汪元量が、その行程に沿って記した七言絶句九十八首の連作を取り上げる。一見すると忠実な記録の紀行詩であるかに思われるが、論者はそのなかの何首かの分析を通して、実は物語的な要素が濃厚なものであって、「詩史」（詩による歴史記述）とする従来の捉え方を否定する。「閨怨詩」など先行する文学様式をなぞったり、各地での見聞を取り込んだり、人物や事件にも脚色を施したり、多彩な手法を駆使して再構成したものだというのである。とはいえ、素材はあくまでも実際の出来事であり、論者の言葉でいえば「現代史」である。現代史を「物語」として語るようになるのは、この時期から始まる、という。詩そのものの分析に踏み込みが十分とはいえないきらいはあるが、事実と叙述、歴史と物語、それらの関わりについて大きな問題に発展させることが期待される章ではある。

「第五章 俞德鄰「京口遣懷」一百韻にみる歴史叙述」は、宋末の時事を百韻二百句に綴った五言古詩を取り上げる。自身の体験を「史料」としながらも、個人を表出することは抑制し、史家の態度が徹底されていることを作品の分析を通して明らかにする。そして同時代を歴史として記述するこのような作品は詩の歴史のなかでも稀有であることを明らかにする。この詩は元に仕えた友人たちに呈した詩であることが詩題に明記されているが、それは作者が新王朝に出仕することを拒否する態度を示すためのものであったと論者は言う。その場に居合わせた人が体験した事柄を歴史としていかに捉え直し、どのように表現しているか、そうした問題を作品に即して探っている。

以上、五つの章がいずれも苦心の論考であり、それぞれに十分な説得力を有することは了解されるが、しかしそれを通して宋元間の「遺民」の実相が明らかになったとは必ずしも言い難い。とはいえ、論者が中国士大夫は時の王朝といかに関わるかという大きな問題を抱き、その具体的あらわれとして個々の章で個別に考察をしていることは確かであって、論者の壮大な構想の第一歩として評価されるべきである。「遺民」という言葉に囚われて硬直しがちであった従前の理解に訂正を迫る指摘も少なくない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2011年2月7日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。